

明るい教室へ

朝の歌ごえを通して

東小学校 小高唯夫

今さら「明るい教室へ」などという、なんだと思われるかもしれない。しかし表題は、どうあろうと、子供達は学級という場で育っていくのだから、学級を明るい空気で、つまなければならぬと思う。

これから述べようとするのも、この目標に、そうためのささやかな、記録である。

話は1昨年にもどる。担任は1年生、52名、初めての1年生で何をしてよいのか、わからずごまごする始末……ともあれ私は、52名の担任教師となったのである。なんとか私なりに歩を進めなければならない。

どうしたら良いか、考えあぐんだ。その結果が、前に述べたような「学級を明るいものにしよう」と、いうことであった。

毎朝、「学校へ行く」といつて、家をでる子供達も、実は学級生活がその大半を占めているのではない。だから学級生活は、学校生活であるといっても、いいではないか。実際、彼等は学級生活をもとし、学級での活動を中心として学校生活がなされ、社会生活に発展していくという姿を見せているのではない。そこでこの学級を明るい空気に、つつもうと、考えたのである。私はこの考えを決めると、何か心が明るくなって、自分をほげしながら、第一歩をふみだしたのである。

52名、全くの他人である。まずこの52名が早く心を知りあうことが必要である。ところが達の心どころか、自分のことさえ、わからぬ彼等である。かくて、うやむやのうちに、一学期も過ぎ2学期もあっけなく、とおりにすぎってしまった。

ところが、3学期もややすぎた或る朝、

「先生、先生、Tさん、ね、流行歌うたってたよ。」

「先生、先生、Nさんは、教壇で歌を、うたって、いるんです。」

と、いったことばが、始業前にきかれた。私は、しまったと思った。彼等もようやく、他人の存在に気をつけはじめたのだ。親しみは理屈から生まれてこない。何とか、この事実を利用して、当初の希望をとげたかった。

そこで「朝の歌」をとりあげてみた。朝の気分のよいときに、歌をうたって、学習をはじめた。そうして、その中から学級生活の良さを、自然に感得させ、それを育てようところみたかった。

私がハーモニカをふく、子供たちがそれにあわせて歌う。朝の歌は教室にあふれ、廊下にも流れていく。なんともいえない爽快さである。

春には、春の歌が、夏には、夏の歌が、うたわれた。

席順に自分の好きな歌をいわせ、私がハーモニカで伴奏し、全員が合唱する。——1人1人、顔をあらわしながら——もちろん私も、にこやかな顔で、ハーモニカを、ふく。

明るい教室へ

朝の歌ごえを通して

東小学校 小高唯夫

今さら「明るい教室へ」などという、なんだと思われるかもしれない。しかし表題は、どうであろうと、子供達は学級という場で育っていくのだから、学級を明るい空気で、つつまなければならぬと思う。

これから述べようとするのも、この目標に、そうためのささやかな、記録である。

話は1昨年にもどる。担任は1年生、52名、初めての1年生で何をしようのか、わからずごまごする始末……ともあれ私は、52名の担任教師となったのである。なんとか私なりに歩を、進めなければならぬ。

どうしたら良いか、考えあぐんだ。その結果が、前に述べたような「学級を明るいものにしよう」と、いうことであつた。

毎朝、「学校へ行く」といつて、家をでる子供達も、事實は学級生活がその大半を占めていないか。だから学級生活は、学校生活であるといつても、いいではないか。實際、彼等は学級生活をもとし、学級での活動を中心として学校生活がなされ、社会生活に発展していくという姿を見せているではないか。そこでこの学級を明るい空気に、つつもうと、考えたのである。私はこの考えを決めると、何か心が明るくなって、自分をはげましながら、第一歩をふみだしたのである。

52名、全くの他人である。まずこの52名が早く心を知りあうことが必要である。ところが、達の心どころか、自分のことさえ、わからぬ彼等である。かくて、うやむやのうちに、一学期も過ぎ2学期もあつてなく、とおろすぎてしまった。

ところが、3学期もややすぎた或る朝、

「先生、先生、Tさん、ね、流行歌うたつてたよ。」

「先生、先生、Nさんは、教壇で歌を、うたつて、いるんです。」

と、いったことばが、始業前にきかれた。私は、しまつたと思つた。彼等もようやく、他人の存在に気をつけはじめたのだ。親しみは理屈から生まれてこない。何んとか、この事実を利用して、当初の希望をとげたかつた。

そこで「朝の歌」をとりあげてみた。朝の気分のよいときに、歌をうたつて、学習をはじめた。そうして、その中から学級生活の良さを、自然に感得させ、それを育てようところみたかつた。

私がハーモニカをふく、子供たちがそれにあわせて歌う。朝の歌は教室にあふれ、廊下に流れていく。なんともいえない爽快さである。

春には、春の歌が、夏には、夏の歌が、うたわれた。

席順に自分のすきな歌をいわせ、私がハーモニカで伴奏し、全員が合唱する。——1人1人が、ろこびの顔をあらわしながら——もちろん私も、にこやかな顔で、ハーモニカを、ふく。

子供達にとっては、声の良し悪しを採点されるわけでもないし、私にとっても、この、うるわし(?)をだすわけでは、ないから両者とも気がらくである。

このようにして、2年生となり、5月もすぎると、子供達は早く自分の番がくるのを、まつようになった。夏休みが近づくころになると、目には見えないが何んともいえないものが教室に育って、ことが感じられた。私は、まちがった道があるとは思わなかった。

輪唱もKをグループとするチャメ連中が1小節わざわざおくれで歌ったことによって、学習した。こんなことから夏休みは輪唱でほとんどすごした。玉川大学の「合唱アルバム」を利用した。なかにも「起きろ、起きろ」は、いやになるほど、よくうたった。

こうしているうちに、学級の祭曲気は高まっていった。夏もすぎ、秋も深かまるにつれますますよくなった。

あの流感が、はやった或る日のことである。SとTがちよつと改まったようすで、私のところへ来てきた。

「先生、Nさんは、あんなに休んでいて、勉強が、おくれなないかな。」

「うん、先生も、そう思っているんだよ」

「先生、先生、おくらしているところ、教えて、やっている。」

「ああ、いいよ。とても良いことだね。でも、風邪がなおってからよ。」

「うん、そうするよ。」

私は、なんだか、胸のあたりにあついものを感じた。いつのまに、こんなに成長したのだらう。うれしかった。ありがたかった。私は、まちがった道はとおってこなかったと、ふたたびかんじた。しかし、まだまだ「閉る教室へ」の道は、ほど遠い。SとTは特別な児童かもしれない。全員助け合う日は、いつの日くるであろうか。

私自身やらねばならない仕事や、やまはどある。学級歌をつくることも、その1つで、あろう。夜の時に、給食の後で、時には、相撲や、雪台戦の時に——みんなで、たのしく歌い、それぞれの心に、たのしい夢を、えがきながら——

これで指導記録は終るが今のところは表題の目標の一步ふみだしたところである。

しかし、次のようなことを、結論としたい。平凡な、わかりきったことであるが——

「新しい教育は、個人の成長を十分考える。それだけに、学級の在り方が、個人へ深い関係を、持っている」

ということである。このことばを、もって「学級王国」のにおいがあると、感じると、すれば、これはまちがっていると、私は信ずるが、どうであろうか。